

## 2012 年度・研究旅行奨励制度

### ◆研究旅行計画書

研究テーマ	フランス革命後のパリにおける階級格差とファッションの記号性について —コルセット着用の歴史に関する調査—	
目的地	国名	地域・都市名
	フランス	パリ

#### 研究旅行の目的

革命後の19世紀半ばにフランスでクチュール (couture/注文仕立業) 組合が創設されて以来、顧客が直接注文してオリジナルな一点ものとして仕立てるオートクチュール (haute couture/高級仕立服) が広まった。それらはもちろん一部のブルジョワジーの特権であったが、20世紀に入って「複製技術」が進み大量生産・大量消費の風潮がさらに強まると、上流階級の人びとしか持ちえなかったものを、一般市民も手にすることができるようになる。その筆頭として1970年代には、あらかじめ作られた衣服を顧客に見せ注文をとるプレタポルテ (prêt-à-porter/高級既製服) が、レディ・メイド (既製服) に対して台頭した。だが、「衣装はそれをまとう者を象徴する」というように、身につけるモノはその人の地位や階級を他人と差異化・差別化するための道具あるいは記号としての役割も担っていることは事実である。ファッションを着るとはすなわち記号 (象徴的な意味を担ったしるし) を着ることにほかならない。

この研究旅行を通して、20世紀の服飾業界における「複製技術」の発展がいわゆるレディ・メイドからプレタポルテを産み出す過程で、新たな社会階級の差によって作り分けられ、着分けられるファッションの記号性にどのような影響を与えたのかを調査する。具体的な記号性として、女性用コルセットを取り上げ、その歴史、形態、機能、素材、色彩などを総合的に調査し、「複製技術」がもたらした階級間の差異が具体的にどのようなものであったのかを考察してみたい。

#### 期待される成果

モードの本場であるパリ市内にあるパリ装飾美術館や図書館で、実際に使用されていた歴代の衣服やそれらの資料文献を見ることで、その当時の人びとがどのような衣服を着用していたか、またその時代ごとの移り変わりを知ることができる。ルーヴル美術館、オルセー美術館では、絵画の中から衣服の様子や時代の特徴を汲み取る。

これらの実体験を通してゼミのテーマであるベンヤミンの『複製技術』についての知識を深めるとともに、これからのゼミでの研究活動や、4年次での卒業論文にも繋げていくことができる。

## ◆報告書

### フランス革命後のパリにおける階級格差とファッションの記号性について —コルセット着用の歴史に関する調査—

15AR040 岩尾未沙

## はじめに

コルセットは美しく、女性的なものであると同時に力強さを兼ね備えたものでもある。コルセットが女性の一般的な召し物として普及していたころは、女性のか弱さやはかない脆さが理想とされる女性像と考えられており、コルセットによって作りだされる細く引き締められたウエストはその女性らしさをあらわすシンボルのひとつとして捕えられていた。そんな女性性の象徴でもあるコルセットだが、実際には身体を無理に締め付け元の自然な造形を変化させて作り出される、苦痛を多くともなうものであった。より女性的に、より魅力的な容姿に見せるために自分の身体を犠牲にしていた当時の多くの女性たちを考えると、そこには女性的なはかない精神以上に力強い女性たちの美への執着心とも言える姿が見えてくる。

コルセットの起源は明確にはわかっていないが、女性が胸部分を保護して支える衣装は古代からみられる。古代ギリシャの文化では女性の身体の凹凸に女性性を見出してはいなかったため、バストや腹部の形をなるべく平らに見せるサポーターのような役割の下着を身につけていた。こうしたサポート用下着としてのコルセットは次第にファッションの分野にも取り入れられていく。今回は主に近世ヨーロッパから近代にかけてのコルセットの歴史について、パリで入手した資料文献のなかから個人的に興味深い内容を取り上げて触れてみたいと思う。



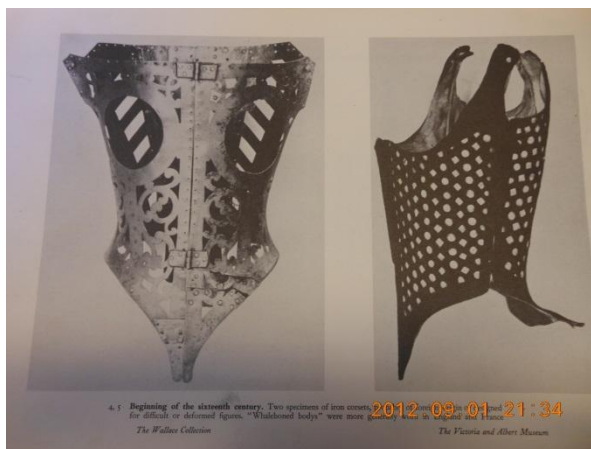
一般的な胸の長いコルセット

(左：1780年ごろ、右：1890年ごろ)

## 金属製のコルセット

まず、さいしょにこのコルセットをみたときは本当にこれがコルセットなのかと疑った。見た感じは騎士が着用している甲冑そのもののような造りである。こういった金属製のコルセットは一般的に普及していたもので、不恰好に歪んだ脊椎の形を矯正するために整形外科で用いられていた。正面から見ると前は先端が長いVの字に尖った形で、背中側はスカートの重さを支えられるようにお尻の上のところで金属が外側に突き出るように折り曲がっている。前2つ、後ろ2つの合計4つの金属の平板で作られ、つなぎ目は蝶番式になっている。重さを軽減させるための穴がいくつもあいており、着たときに金属の端が肌にこすれるのを防ぐために軽い詰め物や織物で内部の裏側を覆っていた。このコルセットはどの時代の流行の様式とも一致しない造りのため年代を正確に示すことは難しいが、早いものでは15世紀からあったのではないかと考えられている。

このような金属や鉄製のコルセットは視覚的な“力強さ”の象徴とされていた。騎士の甲冑が防具としてよりも地位を示す装飾品としての役割を果たしていたように、女性たちもこのコルセットによって自分の地位の高さを示したという。当時の女性たちの衣装は何重にも重ねられたパニエや派手な装飾で重みがあったはずなのに、金属製のコルセットという錘を衣装の内側に締め付けるとなると身体にも相当な負担がかかったはずである。



## 18世紀「新古典主義（ネオ・クラシック）」のコルセット



フランス革命による恐慌の影響が残る18世紀末ごろに「新古典主義（ネオ・クラシック）」の風潮が強まると、軽い生地で作られたシンプルなガウンやシュミーズ・ドレスが流行し、巨大に膨らんだスカートや派手なドレスに代わって生地がより薄いギリシャ風のファッションが好まれるようになった。ウエストラインの位置が胸の下まで上がり、それまでの胴まで長く伸びたコルセットが新しいスタイルにはふさわしくなくなると、コルセットメーカーはすぐに丈の短いものへと移行した。それまでと異なっていたのは胴の部分とカップの部分切り離して8つのパーツをそれぞれ組み合わせてひとつの形にし

ていたところで、とても軽い付け心地だったという。この写真のコルセットは 1795 年にイギリスで作られたもので、フロント部分の丈の長さは 18 センチしかない。

この形のコルセットができた時期は古い形から新しい形への移り変わりの段階でもあった。コルセットという用語もこのころに広まり、それまでの呼び方であった『ステイズ (stays)』のより上品な呼び方として使われ始めた。

## コルセットの大衆化

18 世紀のネオ・クラシカルなギリシャ風のモードが終焉し 19 世紀に入ると、それまでの貴族階級に代わってブルジョアの時代がはじまる。イギリス産業革命によって産業が活発化し、ブルジョア階級や労働者階級の女性たちも上流階級を真似てコルセットを着用するようになった。労働者向けのコルセットは上流階級が身につけていたひとつひとつ手作りで作られるコルセットとは異なる粗い織物で作られた比較的安価なものであったが、複製によってそのようなコルセットが大量に生産可能となったため、都市の人口増加に伴ってコルセットの需要と生産も増加した。19 世紀中ごろのロンドンにはコルセット製造に従事する労働者がおよそ 1 万人いたと言われている。



←コルセットの製造工場  
で働く労働者たち。女性  
の労働者が多かった。

この時代では中流階級以上の女性たちはプライベートや公的な場など TPO に合わせて衣装を着替えるのが一般的であったため、さまざまな用途に合わせてコルセットのバリエーションも豊富になった。親しい者しかいない空間では堅い鯨骨の入ってないゆったりとしたものをつけていたし、舞踏会や婚礼などでは美しいシルエットを作り出すためきついものを着用していた。ほかにも乗馬用、水泳用（鯨骨なしの）、自転車用、旅行用なども作られ、さらにはゴム紐を用いた妊娠中の女性用や少女用のものもあった。

コルセットがここまで一般にも普及した理由のひとつには 1829 年にフランスで「フロント・バスク」という留め具が生まれたこととも関連しているのだと思う。上流階級の女性が付けるコルセットは着用の際に誰かに手伝ってもらうことを前提としていた。しかし前開きができるようになったことでひとりでの着脱が可能になり、大衆にも受け入れやすくなったのだろう。

## コルセットの階級格差

コルセットは一般的な大衆にも受け入れられるようになったものの、装飾過多で豪華なコルセットが支配階級層の女性たちの権威の象徴であるということに変わりはない。コルセットは長い間、「男性中心社会における女性抑圧の象徴」と見なされていた。19 世紀のブルジョワジーの男性たちは自分の妻を飾り立て、働かなくてもいい立場の女性であるということを示すことで経済力のシンボルとしていた。またいつしかその女性たちもコルセットを積極的に身につけ、自身の魅力を引き立たせるためのマスト・アイテムとしてコルセットの地位を高めていった。こうしたブルジョワジーの男女のそれぞれの思考により、女性のコルセットの着用は「道徳的な義務」となったのである。肉体労働に従事する労働者階級の女性たちにとっては、大きく動くことができないコルセットは労働時の服装としては不向きであり、この社会的風潮は過酷なものだったに違いない。

19 世紀は



## 風刺画と反コルセット論

コルセットの着用に関しては多くの絵画や風刺画が描かれている。左の絵はコルセットを強く締めれば締めるほど好ましいとされていたタイト=レイジングを風刺した、ジョン・コレットの『タイト=レイジング、あるいはくつろぐ前のファッション』(1770~75年)という風刺画である。女性のコルセットを締めるために三人もの召使たちが背中中の紐を引っ張っているという場面である。女性は柱につかまり苦痛な表情を浮かべているが、後ろで引っ張る女性と子供の召使いは面白がるかのように笑った表情をしていることから、コルセットをきつく締める風潮が当時の一部の人びとからはばかばかしいことだと思われていたことが読み取れる。



る絵



用し

ほどに一般化していたコルセットであるが、18世紀から19世紀にかけては反コルセット論もそれまで以上に議論されるようになっていた。その反論は主に医療関係者によるもので、

まとめ



出典

『コルセットの文化史』 古賀令子

『Foundation of fashion: The Symington collection』 Christopher Pagé

『Underwear: fashion in detail』 Eleri Lynn

『Corsets and crinolines』 Nora Waugh

写真予備



34 Both ways or the lady's need shoes.